

ひこね市文化プラザ ☎26-8601 FAX 26-8602  
6月の休館日：2月・9月・16月・23月・30月

6月15日(日) 13:00~16:00~ 2回公演  
こどもちゃれんじ ファミリーシアター  
**しまじろうと ゆうえんちへ いこう!**  
指定 1,500円 (3歳以上)  
【好評発売中・残席わずか】  
※完売の際はご了承ください。

7月5日(土) 13:30~  
**お楽しみコンサート「七夕」**  
☆邦楽のお琴をやさしく紹介します。音楽絵本もお楽しみに！赤ちゃんから年配の人まで、だれもが気軽に楽しめる音楽会です。  
☆出演：京都當道 琴尚会  
【鑑賞無料】

8月5日(日) 15:00~  
**大阪シンフォニカー交響楽団 演奏会**  
☆指揮：矢崎彦太郎、ソプラノ：緑川まり、テノール：中鉢聡  
指定 S席 4,000円、A席 3,000円、B席 1,500円  
【7月13日(日)発売開始】

**ひこね市民大学講座**

第1講 7月12日(土) 14:00~  
「言葉のチカラ~私の選んだ道~」  
市原悦子さん (俳優)

第2講 9月7日(日) 14:00~  
「日本の政治経済のゆくえ」  
宮崎哲弥さん (評論家・コメンテーター)

第3講 10月4日(土) 14:00~  
「環境と健康」  
北野大さん (工学博士・明治大学教授)

☆料金：全席自由 4,000円【好評発売中】  
※1講座だけの購入はできません。  
※未就学児の入場はお断りします。  
※要約筆記は、各講演日の10日前までに申し込んでください。

**みずほ文化センター**

8月2日(土) 15:00~  
**菅原洋一&英介 父と子のコンサート**  
☆地元特別出演：コールほなみ  
指揮：高木充江  
自由 3,000円 (当日3,500円)  
【好評発売中】

マーク：託児サービスがあります。(要予約)  
※公演日の1週間前までにご予約ください。  
マーク：公演終了後、彦根駅行き・南彦根駅行きの臨時バスの便があります。(有料)

チケット・入会のお申し込み、お問い合わせは  
**チケットセンター ☎27-5200 (9:00~19:00)**

彦根城博物館 ☎22-6100 FAX 22-6520  
6月の休館日はありません。  
6月24日(火)~同26日(木)は展示替えのため、展示室を一部閉室しています。

開館時間 8:30~17:00 (入館は16:30まで)

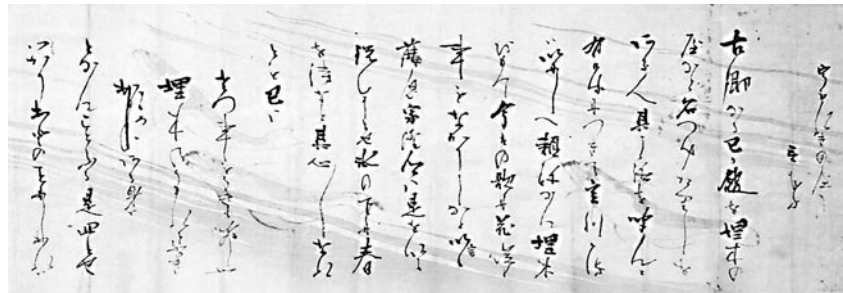
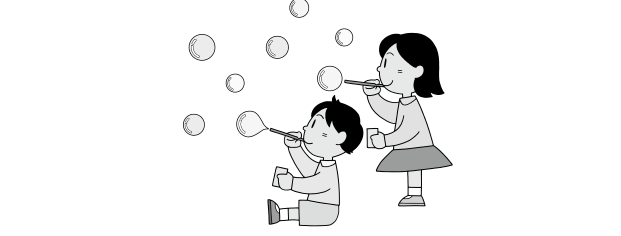
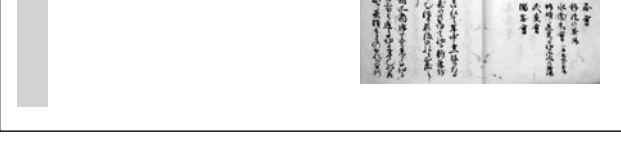
~6月24日(火)  
**直弼発見!** 巻の1  
「井伊直弼 大老への道のり」  
直弼愛用の品々や、心情を吐露した自筆の手紙により、その生い立ちから大老就任にいたるまでの軌跡を紹介します。

6月27日(金)~7月23日(水)  
「弓矢の道—井伊家伝来の武具—」  
武士が修めるべき技として、その筆頭とされた弓術。武家の統領である大名に伝わった、さまざまな弓の道具を紹介します。  
▲弓籠手 (ゆごて)

ギャラリートーク  
「弓矢の道—井伊家伝来の武具—」  
6月28日(土) 14:00~15:00  
解説：本館学芸員 坪内広子 (つぼうちひろこ)  
※事前申し込みは不要です。当日、館内講堂にお集まりください。

特集コーナー  
**直弼のころ**  
幕末の大老、13代藩主井伊直弼 (1815~1860) は、国政を担う政治家として知られる一方、茶の湯や国学、禅、居合などに真摯に取り組む、文化人の面をあわせ持っていました。このコーナーでは、直弼ゆかりのさまざまな作品を集め、その人となりを紹介します。

6月25日(水)~7月22日(火)  
**重要文化財**  
**茶湯をりをり草 井伊直弼筆**  
口切会など、28の茶会の作法について説明した書物。



▲井伊直弼筆「うもれぎのやの言葉」

文化12年(1815)10月29日、彦根城内の槻御殿で男の子が生まれました。父は11代彦根藩主の井伊直中、母は江戸の町人君田家の娘・富。この子こそ、後に13代藩主となり、江戸幕府では大老として活躍した井伊直弼です。しかし、このときすでに直中は、3男の直亮に家督を譲って隠居生活を送っており、14男としての直弼の誕生は、藩にとってはそれほどの大事ではありませんでした。

槻御殿で暮らした直弼は、父のもので種々の武芸や学問に親しみ、充実した日々を過ごしました。そして、天保2年(1831)、17歳のときに父が世を去ることにより、不自由のない日々を終止符が打たれました。御殿から尾末町の「北の御屋敷」に移り、300俵の扶持を給される生活の始まりです。

井伊家には、分家を作らないしきたりがあり、庶子は、他家を継ぐか家臣の養子となるかが常でした。どちらの道もとらない者は、屋敷と扶持を与えられて暮らすこととなります。兄たち

はすでに行き先が決まり、残るは直弼と弟直恭の2人だけとなっていました。3年後、江戸にいる藩主直亮から、直弼と直恭のもとへ、大名家の養子とするから出府せよとの命が出されました。結果、養子の座を射止めたのは直弼だけでした。直恭が、3か月後には延岡藩内藤家の家督を継ぎ、一躍7万石の藩主となったのに対し、直弼は、養子先が決まらないまま1年余りを江戸で過ごし、帰国の途につきます。

1人となった直弼の心中はいかばかりであったでしょう。ここに、江戸藩邸で彼が記したとみられる文書があります。題して「うもれぎのやの言葉」。直弼は彦根の自邸を「埋木舎」と名付け、その意味を和歌で表現しました。

ぎつ事もうきも聞かじや埋木のうもれてふかきころある身は世の中の雑事も煩わしいことも聞かないのころか、ただ埋木のように埋もれて深い心のある身は。そして、自らを埋木にたとえたのは、厭世からではなく、ただなすべき修養にはげもうと

決意したためだといわれています。この文書は草稿のようですが、一筆一筆に精神を集中させており、強い意志を感じさせます。考えを文字にすることにより、自身に言い聞かせようとしたのでしょうか。若き直弼の人生観を知る、極めて重要な資料といえます。

この決意どおり直弼は、世子となるまでの15年間、実に真摯に文武の道にげみましました。禅、茶の湯、和歌と国学、そして居合。茶の湯や居合は、のちに一派を創立するほどでした。近年の研究での直弼は、政治家としてだけでなく、当時の代表的文化人としても注目し、当時の代表的文化人としても注目に値すると考えられています。

多くの兄弟の中で一人他家の養子にも行かず、社会的な活動の場をもたないという状況にあっても、自暴自棄におちいらずに研鑽し続けた直弼。のちに政治の表舞台に立つて活躍した直弼の精神的基盤は、不遇をバネとしたこの埋木舎時代につちかわれたのです。

(彦根城博物館学芸員 高木文恵)

「うもれぎのやの言葉」は、シリーズ「直弼発見!」巻の1「井伊直弼 大老への道のり」で6月24日(火)まで展示しています(期間中無休)。

埋木の決意—井伊直弼のおいたち

とまきの玉手箱

博物館からのメッセージ

